

法然における宗教同一性の形成と成熟

名 島 潤 慈

Formation and Maturity of Honen's Religious Identity

NAJIMA Junji

(Received September 24, 2010)

I はじめに

精神分析家のErikson (1959) が提唱した自我同一性 (以下、同一性と略) は、「自分」というものの全体性・一貫性・連続性を主特徴とする。層的な側面からすれば、同一性は、同一であるという意識的感覚 (conscious sense) と連続性を求めて苦闘する無意識的な努力 (unconscious striving) から成る。また、実存的な側面から見れば、同一性とは、それなくしてはその人の人生の価値が減ずるような何かである。そのため人は、自己の同一性を保持するために命をかけることもある。これは特に、宗教同一性 (religious identity) と民族同一性 (ethnic identity) においてあてはまる。

同一性は、力動的には、パーソナリティのなかの肯定的要素と否定的要素の統合より成る。どちらか一方に偏った同一性は、硬いが脆いものとなる。

同一性の基礎は同一化 (identification)、つまり対象との感情結合である。しかし、同一化によって取り入れたものはあくまでも仮のものであり、取り入れたものを「これこそ自分だ」という形で選択しなおすことによって、初めて心内の取り入れ物 (introjects) は同一性となっていく。なお、同一性の形成は一回限りのものではなくて、青年期以後の生涯にわたるプロセスである。一般的には、青年期・中年期・老人期それぞれに同一性の危機がある。人は、各発達段階における同一性の危機を乗り越えていくことによって、同一性の深化と成熟を果たしていく。

本稿では浄土宗の開祖である法然房源空 (1133-1212) を取り上げ、法然についての筆者のこれまでの論考を元にして (名島, 2009, 2010a, 2010b)、彼の宗教同一性の形成と成熟について検討してみたい。なお、法然の宗教同一性を検討する際、法然の見た夢 (覚醒夢を含む) を基礎資料とする。

II 法然の生活史

法然の生活史は『法然上人行実』(梶村編, 2005) を中心にして、細目は『法然上人行状絵図』(浄土宗聖典刊行委員会編, 1999) や『西方指南抄』(親鸞聖人全集刊行会編, 1980) の中末に所収の「源空聖人私日記」を参照して表1にまとめた。表中の法然の年齢は数え年である。

表1に見るように、法然には9歳のときの父親の殺害、15歳のときの母親の死去といった重要な対象喪失体験がある。特に9歳のときのことは、父親の漆間時国が源内武者定明に夜討ちされるという衝撃的なものであった。ただし時国は死の直前、勢至丸 (後の法然) に対して「汝更に会稽の恥を思い、敵人を恨むることなかれ。これ、ひとえに先世の宿業なり。もし、遺恨

表 1 法然の生活史

年齢	生活上のできごと
1歳	美作国久米南条稲岡荘にて出生。
9歳	父親が殺され、叔父（母の弟）の観学得業の弟子となる。
15歳	比叡山の持法房源光、ついで皇円の室に入り、11月8日に東塔の大乗戒壇院にて剃髪受戒して正式に天台宗の僧侶となる。11月12日、母親が死去（37歳）。
16歳	『法華玄義』『法華文句』『摩訶止観』などを勉強しはじめる。
18歳	比叡山の黒谷の慈眼房叡空の室に入る。「法然房源空」と名づけられる。
24歳	嵯峨の清凉寺に7日間参籠。その後、奈良の法相宗の藏俊を訪問する。以後、32歳の頃までに、三論宗の寛雅、華嚴宗の慶雅、真言宗の実範などを訪問する。 *黒谷時代、法華三昧の修業のとき、白象に乗った普賢菩薩が道場に出現する。
42歳	四天王寺に借住。
43歳	善導の『観無量寿経疏』を読み、余行を捨てて専修念仏に帰す。その後、黒谷を出て、京都の西山の広谷に、さらに東山の吉水に住む。このころ、「二祖対面の夢」を見る。
48歳	嵯峨に住む。このころ、「空海に異議を唱える夢」を見る。
49歳	東大寺再建の大勸進を固辞して、重源を推薦する。
54歳	大原談義。
57歳	8月、九条兼実が初めて法然を招く。これ以後、法然は何度も兼実に授戒する。
58歳	東大寺にて浄土三部経を講義。法然の『無量寿経釈』には「念仏はこれ勝なり、余行はこれ劣なり」とある。
63歳	勢観房源智（1183-1238）が法然の許に入室する。
66歳	1月1日、恒例の別時念仏を開始。毎日7万遍の念仏を称え、三昧発得する。2月28日、風邪によって念仏を中断。3月、九条兼実の頼みで『選択本願念仏集』を選述。4月8日、「没後遺誡文」を作成。5月1日、夢のなかに善導が現れて、「あなたが専修念仏を弘通するので、特にやってきました」と言う。
68歳	源頼家が専修念仏禁止令を出す。
69歳	親鸞が法然の許に入門する。
70歳	1月5日、別時念仏の間に勢至菩薩の大きな顔、12月28日、阿弥陀仏の大きな顔が出現。1月28日、九条兼実が法然を戒師として出家する。
72歳	延暦寺の衆徒が専修念仏の停止を天台座主の真性に訴えたのに対して、11月7日、「七箇条制誡」を作成。
73歳	10月、法相宗の貞慶が「興福寺奏状」を書く。12月8日、和歌「阿弥陀仏と申すばかりを勤めにて浄土の莊嚴見るぞうれしき」。
74歳	1月4・5日、別時念仏の間に阿弥陀・勢至・観音が出現。2月、朝廷が法本房行空と安楽房遵西を配流するとの院宣。11月27日、内大臣の西園寺実宗が法然を戒師として出家。
75歳	2月9日、遵西・住蓮らが死刑になる。3月16日、法然は四国への配流のため、京都を出て讃岐国へ向かう。12月8日、勅免の宣旨がくだり、四国を出て摂津国の勝尾寺に住む（4年間）。
77歳	一念義停止の起請文を定める。
79歳	11月17日、帰洛の宣旨を受ける。11月22日京都に帰り、大谷の禅房（現在の知恩院の勢至堂の場所）に住む。
80歳	1月23日、弟子の源智の願いによって「一枚起請文」を書く。1月25日、死去。9月、『選択本願念仏集』が開板される。

を結ばば、その仇世々に尽き難かるべし」云々と述べている（『法然上人行状絵図』第1巻）。

Ⅲ 法然の生活史における夢・覚醒夢・幻視

1. 法然の夢・覚醒夢・幻視

法然が見た夢・覚醒夢・幻視については表2にまとめた。表中の三昧発得（瞑想状態のなかで仏や浄土などの聖境を観想すること）は、「三昧発得記」による。「三昧発得記」には数種類のものがあるが、ここでは、親鸞が85歳から86歳にかけて編集ないし書写した『西方指南抄』のなかの中本に収録されている「建久九年正月一日記」によった。三昧発得の内容の詳細は表3にまとめた。内容的には『観無量寿経』（中村ら訳註, 1991）における13の観のうち、日想観・水想観・地想観・宝樹観・宝池観・宝殿観・阿弥陀仏観・観音観・勢至観という9つの観が出現している（観の呼び方は法然によった）。なお、表2のなかの善導（613-681）は中国浄土教の大成者である。観想念仏と同時に、称名念仏を重視した。

表2 法然の夢・覚醒夢・幻視

年齢	夢・覚醒夢・幻視	備考
20-30代	黒谷時代、法華三昧の修業のとき、白象に乗った普賢菩薩が道場に出現する（『法然上人行状絵図』第7巻より）。	覚醒夢？幻視？集団幻視？
43歳頃	「二祖対面の夢」を見る。	法然が夢のなかで善導と問答する。
43歳頃かそれ以後	「安元元年乙未、聖人齢四十三より始めて浄土門に入りて、閑かに浄土を観じたまふに、初夜に宝樹現ず、次の夜瑠璃の地を示す、後夜は宮殿之を拝す、阿弥陀の三尊常に来至したまふ」（『源空聖人私日記』より）。	伝統的な天台浄土教の観想念仏？後に捨て去る？
48歳	「空海に異議を唱える夢」を見る（『法然上人行状絵図』第5巻より）。	嵯峨に住んでいる頃。空海の『十住心論』についての異議。
66歳	三昧発得：1月、明相、水想、地想など。2月、宝樹、宮殿など。5月1日、夢のなかの善導が、「あなたが専修念仏を弘通するので、特にやってきました」と言う（「善導から祝福される夢」（『法然上人行状絵図』第11巻より））。	3月、『選択本願念仏集』。4月8日、「没後遺誠文」。善導の短い言葉のみ。
69歳	三昧発得：2月8日、鳥の声、琴や笛の音。その後、笙の音など。	
70歳	三昧発得：1月5日、勢至菩薩の大きな顔が3回出現。12月28日、阿弥陀仏の大きな顔。	
73歳	12月8日、和歌「阿弥陀仏と申すばかりを勤めて浄土の莊嚴見るぞうれしき」。	
74歳	三昧発得：1月4・5日、阿弥陀・勢至・観音の三尊が出現。	

2. 二祖対面の夢についての検討

「二祖対面の夢」が記されている「法然聖人御夢想記 善導御事」（『西方指南抄』中本に所収）には日付がなく、「夢感聖相記」（『拾遺漢語灯録』に所収）（中野, 1994）の奥付には「建久九年五月二日記之 源空」とある（建久9年の法然房源空は66歳）。「源空聖人私日記」には明確な日付はないものの、記事の前後関係からすれば、「二祖対面の夢」は比叡山を下りる前後になる。『九巻本法然上人伝絵』も同様の時期である。

表3 三昧発得記の内容

年齢	三昧発得の内容	備考
66歳	1月1日、明相が少し現れて、自然にあたりが明るくなる。1月2日、自然に水想観。総じて、7日間のうちに地想観と瑠璃の相（瑠璃色の大地）。2月4日、はっきりと瑠璃色の大地。2月6日と7日、瑠璃色の宮殿。（病によっていったん念仏を中断した後）右目に空色の光りなど。眼中に瑠璃色の壺。日が暮れて外に出ると、赤や青の宝樹が見える。木の高さは、心にしたがって低くなったり高くなったりする。9月22・23日、地想観。	法然によれば、水想・地想・宝樹・宝池・宝殿の5つの観、1月1日から2月7日までの37日間、毎日7万遍の念仏を勤めたことによってこれらの相（姿）が生じた。9月の地想は毎日6万遍の念仏。
68歳	2月のころ、地想など5つの観をいつでも心に従って自在に体験する。	
69歳	2月8日の夜、鳥の声や琴・笛の音を聞く。その後日が経つにつれて、自在にこれらの音を聞く。笙の音なども聞く。	
70歳	1月5日、（勢至菩薩の背後に）勢至菩薩の大きな顔が3回出現。1月6日、坐っている場所の周囲が一段高くなる。青瑠璃の大地。12月28日、阿弥陀仏の大きな顔が出現。	念仏法門の正しさを証明するために勢至菩薩がその顔を現したという法然の感想あり。青瑠璃の大地は、「往生疑いなし」（『観無量寿経』第三観では、極楽国地を觀せば必ず浄国に生まれんとある）。
74歳	1月4日と5日、念仏の間に阿弥陀・勢至・観音の大身が出現する。	

舜昌による『法然上人行状絵図』では、第7巻において、黒谷時代の奇瑞の記事に続いて「二相対面の夢」が詳しく記されており、第11巻では建久9年5月1日の夢として、善導の「あなたが専修念仏を弘通するので、特にやってきました」という言葉のみが記されている。『法然上人行状絵図』に依拠すれば、法然は善導に関する夢を2回見たことになる。すなわち、43歳の頃に「二相対面の夢」を、66歳のときに「善導から祝福される夢」を見たことになる。

ところで、法然が43歳の頃に見た「二相対面の夢」は、上半身が黒色の僧形で下半身が仏身のような金色の僧（善導）と法然とが対話するというものである。対話の部分を分かりやすく書くと、以下ようになる。〈 〉内は法然の質問である。

Q1〈ここに來られたのはどなたでしょうか〉→「私は善導です」

Q2〈どういふことでやって來られたのですか〉→「あなたが専修念仏のことをおっしゃるのが大変貴いからです」

Q3〈専修念仏の人はみな往生できるでしょうか〉→法然はその答を聞かないうちに夢から覚める。

以上のような3つの質問という構成は、「法然聖人御夢想記 善導御事」と「夢感聖相記」に見られる。『法然上人行状絵図』第7巻ではQ3が欠如している。「源空聖人私日記」ではQ1・Q2・Q3のすべてが欠如し、「汝不肖の身たりといえども、念仏興行一天に満てり。称名専修衆生に及ぼさんが故に我ここに來たれり、善導即ち我なり」という善導の言葉のみが記されている。

「二祖対面の夢」のなかで法然は善導に対して3回問を発しているが、問題はQ3である。法然は善導に対して「専修念仏の人はみな往生できるのでしょうか」と質問するが、その答を聞かないうちに夢から覚めてしまう。このことは、専修念仏者が本当に往生できるか否かの答は法然自身が見つけなければならないという宗教的課題を夢が法然に突きつけているものと思われる。

3. 法然66歳、5月1日の夢における善導の言葉について

先述のように、法然は66歳の5月1日に再び善導の夢を見ている。法然は66歳になった年の3月に主著の『選択本願念仏集』を選述しているので、「あなたが専修念仏を弘通するので、とくにやってきました」という夢のなかの善導の祝福の言葉は、主著を善導に認可されたいという法然の欲望の反映かと思われる。これは、構造としては、『観無量寿経疏』（藤田, 1985）を書き上げた善導（40代）や、『往生要集』（石田校注, 1970）を書き上げた源信（44歳）の場合とよく似ていよう（善導の場合には賢者・阿弥陀仏・人々が、源信の場合には観世音菩薩と毘沙門天が祝福している）。

4. 三昧発得記について

以前に検討したように（名島, 2005）、法然の三昧発得は夢のなかでの体験ではなくて、覚醒時のイメージ現象（口称念仏中に生じた覚醒夢）と思える。この三昧発得の体験は浄土宗学の立場からすれば、「たんなる法然自身における宗教経験としてでなく、法然の示す念仏の実践と理論とに一貫して流れる真実性として、さらに法然の浄土教の体系づけの根拠として、その意義はまことに大きい」（高橋, 1975）とされ、さらに、三昧発得の事実は「法然上人の体験を通して『大乘仏教の展開における普遍性を典型的に発揮している』」ものとみなされている（藤本, 2009）。

（1）三昧発得記には「恒例正月七日、念仏始行」とあるので、法然は66歳以前にも別時念仏を行っている。この66歳以前の別時念仏でも三昧発得記に記載されているような極楽浄土のさまざまなイメージが出現していたかどうか問題となろう。

法然は死去する直前の1月11日（80歳）、「凡この十余年より、念仏の功つもりて、極楽のありさまをみたまつり、仏・菩薩の御すがたをつねにみまいらせたまひけり。しかりといえども、御意ばかりにしりて、人にかたりたまはず侍あひだ、いきたまへるほどは、よの人ゆめゆめしり侍ず。おほかた真身の仏をみたまつりたまひけること、つねにぞ侍ける」云々と述べている（『西方指南抄』中本に所収の「法然聖人臨終行儀」より）。この「十余年より」という言葉からすれば、66歳のときの別時念仏から初めて極楽浄土のさまざまなイメージが出現したと言ってもよい。

ただし、「源空聖人私日記」には、「安元元年乙未、聖人齡四十三より始めて浄土門に入りて、閑かに浄土を觀じたまふに、初夜に宝樹現ず、次の夜瑠璃の地を示す、後夜は宮殿之を拝す、阿弥陀の三尊常に來至したまふ」と記されている（安元元年は1175年、法然43歳）。もしも法然が43歳の浄土門歸入のしばらく後に（あるいは直後に？）実際にこのような観想を行っていたとしたら、66歳のときの別時念仏からとは矛盾することになるが、この点はよく分からない。可能性としては、43歳のころの法然はまだ、伝統的な天台浄土教の観想念仏（源信の『往生要集』に基づく観想）を行っていたが、後にそれを捨てたということが考えられるかもしれない。

（2）三昧発得の前半部（66-69歳）における合計5つの観（最初の日想を入れれば6つの観）

は、最初は自然に生じ、後では自在に体験する。(69歳のときの、鳥の声や琴・笛の音なども最初は自然に生じ、後には自在に聞くようになっている。)結局、視覚的イメージも聴覚的イメージも、最初は別時念仏中に自発的に生起し、後にはイメージ操作が可能となっている。自発的に生起した理由は、法然によれば、毎日7万遍の念仏を勤めたことである。その意味では、法然の三昧発得は口称念仏三昧発得となる。イメージに関するプロセスは、「イメージの自発的生起→イメージ耽溺→イメージ操作」となる。

(3)三昧発得の後半部(70-74歳)における阿弥陀仏・観音菩薩・勢至菩薩の3つの観について。記述の仕方から見て、勢至菩薩や阿弥陀仏の顔などは別時念仏中に不意に出現している。この三昧発得の後半部において三尊が出現したのは、専修念仏に対する圧迫が次第に強まっていったことと関係するものと思われる。

特に法然が74歳のときの1月4・5日には、念仏の間に阿弥陀・勢至・観音の三尊が出現している。生活史的には、前年の73歳の10月、法相宗の貞慶(1155-1213)が法然の専修念仏の停止を求める「興福寺奏状」を書いている。そして、その2か月後の12月8日には、法然は和歌「阿弥陀仏と申すばかりを勤めて 浄土の莊嚴見るぞうれしき」を詠っている。

このようにしてみると、三昧発得の「うれしき」イメージ体験は法然にとって、法然の宗教同一性を肯定すると同時に、法然の魂の治療者のような役割を果たしたのではないかと思われる(三昧発得記そのものには法然の感情はまったく記されていない)。実際のところ、スピリチュアリティ(spirituality: 霊性)の次元のことがらにはもっぱら霊的なイメージ(spiritual image)と相関しているものである。その場合、「霊的」と「心理的」とはつながりはあるけれども、相互に置き換えられるものではない。前者はいわゆる魂と、後者はもっぱら欲望と関係する言葉だからである。

IV 法然にとっての善導と三昧発得の体験

善導の生活史は表4に、善導が40代に書いたものと思われる『観無量寿経疏』に記されている善導の夢については表5にまとめた(善導の生活史は、小笠原, 1941, 藤田, 1985, 秋山ら, 2005, 爪田, 2006を参照した)。なお、表5のなかの「夢の意義」は筆者自身の考察による(名島, 2009を参照されたい)。

法然にとって唐の善導は、法然の『選択本願念仏集』(大橋校注, 1971)に記されているように、「これ三昧発得の人なり」であり「弥陀の化身」である。その意味では、法然自身が三昧発得を体験したことは、自分が善導、ひいては弥陀と直接結合していることを確信させるものであったと思える。(43歳頃に見た「二祖対面の夢」での法然はあくまでも、善導への質問者という立場であった。しかも、最後の「専修念仏の人はみな往生できるでしょうか」という質問に対する答は得られなかった。)

1. 法然と善導の体験の違い

善導は『観無量寿経疏』を執筆する前に、これから『観無量寿経』の正しい解釈を確定しようと思うが、それが三世の諸仏・釈迦牟尼仏・阿弥陀仏などのころにかなうならば夢のなかですべての境界のもろもろのありさまを見せてくださいとお願いし、毎日『阿弥陀経』を3回読み、阿弥陀仏を3万遍、心をこめて願った。すると夢のなかで、宝山、光明、金色のような大地、諸仏・菩薩を見た。さらに、夢のなかで1人の僧(法然によれば「阿弥の応現」)がいろいろと教示してくれた。『観無量寿経疏』を書き上げた後も、夢のなかに白いラクダに乗っ

表4 善導の生活史

年齢	生活上のできごと
1歳	山東省の臨淄にて出生。俗姓は朱。
10歳頃	山東省の密州で、明勝法師（三論宗）のもとで出家し、『法華経』と『維摩経』を学ぶ。 *善導は口減らしのために出家させられた可能性あり（秋山ら, 2005）。
15歳頃	西方浄土変相図を見て感銘する。各地をめぐるて仏道の師を求める。
21歳	具足戒を受ける。妙開律師と共に『観無量寿経』を見る。その後、長安（現在の西安）の東南の終南山の悟真寺に入って数年間観行につとめる。
26歳	山西省の石壁山の玄中寺にいた道綽を訪問する（道綽は『観無量寿経』の宗旨を観仏三昧とした）。以後、道綽に師事する（善導33歳のときに道綽は死去）。
30歳前後	『観念法門』を撰述。
35歳前後	長安（現在の西安）に入り、悟真寺に住む。時折、長安の光明寺にて布教活動をする。
36歳	長安の慈恩寺でも教化活動を行う。*長安に入ってから死去するまで、『阿弥陀経』を数万巻書写し、西方浄土変相を三百舗あまり描く。
40代(?)	『観無量寿経疏』を書く。
50歳	このころ、善導の信者が光明寺の門前の柳の木から捨身往生する。
53, 4歳頃	襄州（湖北省襄陽県）で貞固を教化する。
56歳	長安の實際寺に住む。
60歳	検校僧（監督僧）として、洛陽の龍門の大廬舎那仏像の造像に携わる。*善導が華嚴宗の本尊である大廬舎那仏（毘廬舎那仏）の造像の責任者を引き受けた理由として、龍門石窟における浄土信仰、阿弥陀仏信仰の興隆に強く魅かれたことが考えられる（爪田, 2006）。
62歳	12月30日、大廬舎那仏像が完成する。
63歳頃	『法事讃』を書く。
67歳	大廬舎那仏像の南に建てられた奉先寺の落慶に招かれる。
69歳	長安の南の神禾原にて死去。

表5 善導の夢の様態と意義

No	夢のタイトル	夢を見た場所	夢告の主	夢の主役	夢の意義
D1	色とりどりの宝の山と種々の光明のなかにいろいろな仏や菩薩を見る夢	長安の東南の終南山の悟真寺(?)	夢告なし	いろいろな仏や菩薩	『観無量寿経』を再解釈しようとする善導の意図の承認
D2	1人の僧が経文の奥深い意味を教示してくれる夢	終南山の悟真寺(?)	1人の僧	1人の僧	『観無量寿経』の経文の意味の教示（「一僧」は法然によれば「弥陀の応現」）[「1」は阿弥陀仏を表す。]
D3	3台の石臼が回転するなかを白いラクダに乗った人がやって来て善導に忠告してくれる夢	終南山の悟真寺(?)	白いラクダに乗った人(賢者)	白いラクダに乗った人(賢者)	『観経疏』の認証（善導のこれからの生き方についての忠告と激励）[「3」は、至誠心・深心・廻向発願心を表す。]

D4	七宝の樹の下の金の蓮華の上に座る阿弥陀仏とそれを取り囲む10人の僧を善導が拝観している夢	終南山の悟真寺(?)	夢告なし	阿弥陀仏と10人の僧	『観経疏』の認証(阿弥陀仏への敬意の表れ) [「7」の意味は不明。「10」は十声を表す。]
D5	5色の旗がかかった高く大きい2本の旗竿を人々が眺めている夢	終南山の悟真寺(?)	夢告なし	2本の旗竿	『観経疏』の認証(善導の宗教的信念に対する人々の敬意の表れ) [「5」は読誦・観察・礼拝・称名・讃歎供養の5つの正行。「2」は、罪悪生死の凡夫という機の自覚と、阿弥陀仏の本願によって救済されるという法の立場を表す。]

た人や阿弥陀仏、宝樹などが出現した。

善導の場合には、このようにすべては夢のなかのできごとであった。一方、法然の場合には別時念仏中の覚醒夢のできごとであった。この点が2人の違いであった。内容的にも、善導の夢と法然の三昧発得は完全には重ならない。強いて言えば、表5の善導の夢のなかでD1の「色とりどりの宝の山と種々の光明のなかにいろいろな仏や菩薩を見る夢」が法然の三昧発得と重なっている。法然の三昧発得は善導の夢の系列よりも、『観無量寿経』における観法の系列に沿っている。

2. 善導にまつわる法然の連想のプロセス

法然と善導では以上のようにいろいろな違いはあるものの、善導にまつわる法然の連想のプロセスは、資料に基づいて推測すれば以下になるだろう。

①善導が書いた『観無量寿経疏』は夢中の霊相によってその価値が保証されたものである。何よりも、『観無量寿経疏』は、阿弥陀仏の応現である僧の導きによって書かれた「弥陀の伝説」である。

②このようにしてみると、善導その人も実は、阿弥陀仏の化身であった。

③阿弥陀仏の化身である善導が夢のなかで私に会いに来たのは、善導が私を、善導の後継者とみなすことを意味している。

④ただし、善導は私に、専修念仏者が本当に往生するかどうかの答は、善導に頼らずにお前自身が見出さなければならないという重要な人生課題を突きつけた。

⑤私は後年、善導が夢のなかで体験した「浄土の莊嚴」「仏・菩薩」を称名念仏中に体験したので、専修念仏者が本当に往生するという身を身をもって示したことになる。

⑥このようにして私は、善導が主張する称名念仏の正しさを実証したのである。

V 法然の宗教同一性

1. モラトリアム期間とモラトリアムからの脱出

法然の10代後半から40代前半までの、宗教的遍歴時代(比叡山の黒谷時代)は、Erikson (1959)の言うモラトリアム期間(心理・社会的猶予期間)に相当しよう。法然はこのモラトリアム期間においてさまざまな思考実験を繰り返す。法然伝の古熊とみなされている「源空聖人私日記」

には、「諸宗の教相を窺ふに、顕密の奥旨を悟る。八宗の外に、仏心・達磨等の宗の玄旨に明らかなり」とある（文中の「顕密」は顕教と密教、「八宗」は華嚴・律・法相・三論・成実・俱舎・天台・真言の8つ、「仏心」は禅宗のこと）。宗教学者の赤松（1958）も、「源空が叡山・南都で成就した修学については、天台・三論・法相・大乘律の諸宗に関する事実が知られており、ことによると真言宗をも修学したかもしれない」と述べている。

法然はこのように、仏教のさまざまな宗派の教典を涉猟している。また、黒谷時代には、行の上でも、法華三昧の修業を行っている。表2に記したように、法華三昧の修業中、白象に乗った普賢菩薩（Samantabhadra）が道場に出現したという（『法然上人行状絵図』第7巻より）。この法華三昧は、『摩訶止観』（関口校注、1966）の第2巻の上に記されている「四種三昧」のうちの半行半坐三昧に属する。比叡山の法華三昧堂のなかで普賢菩薩像の周りを回ったり結跏趺坐して、日夜六時（1日のなかの6つの時）に懺悔したり礼拝したり『法華経』を読んだりしながら、一切法空を観じるものである。白象に乗った普賢菩薩が出現したのは、『法華経』の巻第8の「普賢菩薩勸発品」（坂本・岩本校注、1976）に「この人、若しくは行み若しくは立ちてこの経を読誦せば、われはその時、六牙の白象王に乗り、大菩薩衆と俱にその所に詣りて、自ら身を現し、供養し守護して、その心を安んじ慰めん」云々と書かれている通りである（池田、1998をも参照）。普賢菩薩の出現様態はおそらく、法然の覚醒夢（白日夢）か幻視であったろう。

ともあれ法然は思想遍歴の末、源信の『往生要集』や永観の『往生拾因』などを媒介として、最後に善導の『観無量寿経疏』との出会いによって、43歳のとき余行を捨てて専修念仏に帰している。つまり、法然の宗教同一性はこの時点でいったん確立されている。しかし、自分が選択した宗教同一性を維持し深化させていくには時間がかかる。特に、「二祖対面の夢」の答、つまり専修念仏者が本当に往生できるかどうかについての解答は、長い時間のかかる課題となった。三昧発得の体験はおそらく、法然にとってはこの解答となるものであった。

一般的に言って、宗教同一性は内的・外的な圧迫によってより強く純化したものとなっていく。逆に変質させられたり、崩壊させられたりする。状況によれば、いったん確立した宗教同一性を廃棄させられることもある。

四国に流刑が決まったとき、法然は世間の機嫌をおもんばかりの門弟の西阿に対して、「我、仮令、死刑に行なわれるとも、この事（筆者注：専修念仏の教え）言わずばあるべからず」と述べ、法然はさらにまた、「流刑さらに恨みとすべからず」「今、事の縁によりて年来の本意（筆者注：辺鄙な土地に住む田舎の人々に専修念仏を勧めること）を遂げん事、頗る朝恩ともいふべし」と述べたという（『法然上人行状絵図』第33巻より）。このような言葉からすれば、法然の宗教同一性は流刑という外的な圧迫によって、より純化したものとなっていくといえる。

2. 法然の信念と情念

たとえ死刑になったとしても専修念仏の教えを言わないわけにはいかないというのは、法然の「信念」である。信念は同一性の中核であり、忠誠心（fidelity）、つまり自分が選択したものに忠誠を尽くそうとする心の態勢を引き起こすものである。

このような信念を支えていたのは「情念」、すなわち善導に対する強烈な感情結合であったかと思える。そして、この感情結合の象徴が三昧発得のイメージ体験であった。これによって法然は、自分が善導としっかりとつながっていることを再確認できたのではないかと思える。まとめれば、43歳頃の「二祖対面の夢」、66歳のときの「善導から祝福される夢」、69歳以後の、

善導の夢の一つと類似した宗教的イメージ体験といった具合に、人生の後半生における法然は常に善導と絡み合っていた。

ちなみに、直接資料がないので推測になるが、善導に対する強烈な感情結合の背景として、法然が9歳のときに自分の父親を失っていたということが考えられるかもしれない。もちろん法然は18歳のときに比叡山の黒谷の慈眼房叡空の室に入っているが、慈眼房叡空は思想の深さや方向性という点で法然が満足できる人ではなかった。一方、善導は思想面でも、法然の思想遍歴を終了させた人であった。

3. 同一性の二面性

九条兼実の日記『玉葉』（高橋、1990）に記されているように、法然は九条兼実やその妻・娘に対して何度も彼らの病気を治すための授戒を行っている。ここにはたしかに授戒（九条家の側からすれば受戒）の祈祷化がうかがわれる。九条家を訪問する法然の姿は、もっぱら病氣治しを期待されている民間祈祷師といった趣がある。ただし、資料を見る限りでは、法然が民間祈祷師という役割的同一性を引き受けたのは、九条兼実を初めとする貴族層に対してのみであった。ともあれ法然には、「天台宗の戒師としての法然」と「専修念仏者としての法然」、「病氣治しという現世利益的な法然」と「浄土往生を志向する法然」といった二面性がうかがえる。称名念仏のみを勝行とし、他をすべて劣行とみなすという法然の選択と主張は、必然的に「劣行」とみなされた宗教組織からの反発と圧迫をひきおこさざるをえない。この二面性はしかし、外部からの反発と圧迫に対する法然なりの対処法であったものと思われる。

最初に述べたように、同一性は、心理力動論的な見地からすれば、パーソナリティのなかの肯定的要素と否定的要素の統合より成る。どちらか一方のみに偏った同一性は、当然のことながら、硬いが脆いものとなる。しかも宗教同一性の場合、その構成要素が肯定的な要素ばかりになってしまうと、きわめて危険な「自我肥大」（自分を神ないし仏と同一視すること）に陥ってしまうことになりかねない。

このような点から考察してみると、同一性の否定的要素に関して言えば、授戒する法然は外的な否定的要素で、三昧発得という聖なるイメージに感激する法然は内的な否定的要素と言えるかもしれない。特に後者の場合には、「無観称名を主張する専修念仏者」という、法然の同一性の肯定的要素と拮抗してしまう。しかしながら、肯定的要素のみからなる同一性は、硬いが脆いし、場合によれば自我を肥大させる。光が際だつのも陰影あればこそである。法然の豊かな宗教的人格はむしろ、肯定的要素と否定的要素の間で動揺しながらも、この二つをバランスよく統合していくことの上に成り立ったものではないかと思われる。

法然は80歳で死去するが、死の2日前の1月23日、弟子の源智の願いによって「一枚起請文」（大橋校注、1971）を書いている。そこには、「もろこし我がてうに、もろもろの智者達のさたし申さるる、観念の念ニモ非ズ。又学文をして念の心を悟リテ申念仏ニモ非ズ。ただ往生極楽のためニハ、南無阿弥陀仏と申て、疑いなく往生スルゾト思いとりテ、申外ニハ別ノ子さい候はず」とある。法然は専修念仏の主旨として、それは観想の念仏でもなく知的な理解によってつかみとる念仏でもない、浄土に往生することを疑わないでひたすら称名する念仏であることを強調している。「一枚起請文」はいわば、門弟たちへの遺言である。ここには、それまでにかがわれた否定的要素はすべて払拭されて、専修念仏のみが輝いている。これが法然の宗教同一性の最終形態であったと言えよう。

VI おわりに

法然についての論考は数多いが、これまで法然の宗教同一性について論じられたものはないようである。このことの一因として、法然が自らを語ることがきわめて少なかったということが挙げられよう。十分な資料が揃わないと、宗教同一性を吟味・分析することはむずかしい。このように限界はあるが、筆者は本論文において、法然の夢や覚醒夢を中心にして彼の宗教同一性について検討してみた。考察の足りないところも少なくないので、今後も残されている資料を読み込むことによって検討を続けたい。

文献

- 赤松俊秀 (1958) 仏教の課題 史学雑誌, 67(7), 1-45.
- 秋山博正・原田和男・松田正典 (2005) 善導のリアリズムの精神とその歴史的展開 くらしき作陽大学・作陽短期大学研究紀要, 38:1, 1-51.
- Erikson, E. H. (1959) *Identity and the life cycle*. New York: International Universities Press, Inc. (小此木啓吾訳編, 1973, 自我同一性, 誠信書房)
- 藤本浄彦 (2009) 法然浄土宗学論究 平楽寺書店
- 藤田宏達 (1985) 善導 講談社
- 池田魯参 (1998) 訓読注解・法華三昧行法 駒沢大学仏教学部研究紀要, 56, 27-66.
- 石田瑞麿 (校注) (1970) 源信 岩波書店
- 浄土宗聖典刊行会委員会 (編) (1999) 浄土宗聖典 第6巻 法然上人行状絵図 浄土宗発行
- 梶村 昇 (編) (2005) 法然上人行実 浄土宗出版
- 名島潤慈 (2005) 法然の「三昧発得記」の臨床心理学的研究 山口大学教育学部附属教育実践総合センター紀要, 19, 77-91.
- 名島潤慈 (2009) 夢と浄土教—善導・智光・空也・源信・法然・親鸞・一遍の夢分析 風間書房
- 名島潤慈 (2010a) 法然における宗教同一性の形成と成熟—二祖対面の夢と三昧発得記を中心にして 第95回浄土宗教学高等講習会講義資料 於大本山増上寺 (東京)
- 名島潤慈 (2010b) 法然における宗教同一性の形成と成熟—唐の善導との関係を軸にして 第96回浄土宗教学高等講習会講義資料 於総本山知恩院 (京都)
- 中村 元・早島鏡正・紀野一義 (訳註) (1991) 浄土三部経 (下) 観無量寿経・阿弥陀経 岩波文庫
- 中野正明 (1994) 法然遺文の基礎的研究 法藏館
- 小笠原宣秀 (1941) 善導大師と襄陽 支那仏教史学, 4(4), 67-68.
- 大橋俊雄 (校注) (1971) 法然 一遍 岩波書店
- 坂本幸男・岩本 裕 (校注) (1976) 法華経 下 岩波文庫
- 関口真大 (校注) (1966) 摩訶止観 上・下 岩波文庫
- 親鸞聖人全集刊行会 (編) (1980) 定本親鸞聖人全集 第5巻 輯録篇 西方指南抄 法藏館
- 高橋弘次 (1975) 法然の念仏三昧について—特に口称念仏の深勝性を中心として 日本仏教学会年報, 40, 175-188.
- 高橋貞一 (1990) 訓読玉葉 第8巻 高科書店
- 爪田一寿 (2006) 善導浄土教のいわゆる「国家仏教」的側面について—『法事讃』と龍門石窟インド仏教学研究, 13, 103-113.